

五丁月
 所
 經
 亦
 高
 山

修政士
佐々木孝和
板金屋

先王の命に承るは天子の命に承る人如神
と云ふことなり此の如く天子の命に承る人如神
と云ふことなり此の如く天子の命に承る人如神

去る名士の書所
 長年所
 三月
 筆

[illegible]

八月廿四日

伊豆の山を登る

山頂に雲が湧き出た。伊豆の山は、

山頂に雲が湧き出た。伊豆の山は、

山頂に雲が湧き出た。

山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

伊豆の山は、山頂に雲が湧き出た。

送 田中先生
芳名ありてはあはれ

[illegible]

新教出たりと利に於て先を争ふ者有り
 此の爲に其の心を争ふ者有り
 争ふ者有りと云ふは其の心を争ふ者
 有り
 此の爲に其の心を争ふ者有り

王

邪生乃

一 凡そ人の心を動かすものは、
其の心を動かすものなり。
其の心を動かすものなり。
其の心を動かすものなり。

杜少陵先生集

子方者事仲尼而昂在處也
 子方者事仲尼而昂在處也

三石府知府任那末上院書

二月九日

[illegible]

中

人倫之理
 乃其所以
 爲之者
 其理之
 爲之者
 其理之
 爲之者

月夜舟中懷下樓主人

聖賢

人して三陽を以て陽を重んずる外
 たるは五時を以て陽を以て陽を重んずる外
 尸を以て陽を以て陽を重んずる外

王月松

好色之徒

心素如雪

東坡先生集卷之五
詩集卷之五

多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、
多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、

多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、
多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、

多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、
多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、

多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、
多量に見ても、いかに、
中々、
少くも、

Handwritten text in a cursive script, possibly a title or a long name.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or a long note.

Handwritten text, possibly a title or a long name.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

Handwritten text, possibly a date or a short note.

一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは

一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは
一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは

一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは
一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは

一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは
一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは

一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは
一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは

一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは
一 何れも此の世に生れしは
一 ともかくも此の世に生れしは

此の書は、
たゞの書か
るゝもの
なり

此の書は、
たゞの書か
るゝもの
なり

此の書は、
たゞの書か
るゝもの
なり

此の書は、
たゞの書か
るゝもの
なり

此の書は、
たゞの書か
るゝもの
なり

壬子月廿六

一、李汝珍

長江

二日未年八月十九日

[illegible]

日中申年六月十日附
 大寺詣和上の野物と南二月若狭の因縁
 板書りあり 仁孝曰月九日夕方に到りて
 右書紙より出でたる南二月若狭の因縁
 月物并言用ひて所發の右物并に別書
 主書りあり 仁孝曰月九日夕方に到りて

日 年 七 月 十 日 附 子

[illegible]

九月
考三日と書けるは當年三月廿日爲りて
即ち三月廿日を以て爲るなり

字多如故

別和書云云 尚書司馬公曰 白雲而後落
市後 即第宅代耕桑似 志下 丁 爲 務 之
事 曰 將 攻 乎 齊 人 於 是 而 事 之 人 便

心付の... 次印一糸

中... 十三日

早月... 布...

... 布...

... 布...

西行集

井上四郎次

六月十七日

張中江

六月十七日
不
但此又由十二月五日未了の
江うききり、馬を面みし

一
新
知
集
卷
之
一

何處隱身

一
字
如
此

あふをたふす

万々通五月十日村上西常八の儀
 昨あな中六日申す如く
 事々あな人々
 ありかて向ふて申す人々
 死羽仕りぬる人々

三

書畫

三

10

十

一、
 一、
 一、
 内目之門
 相年
 口化
 あり
 所

若病以
心爲
不爲
此部

汪公序

